

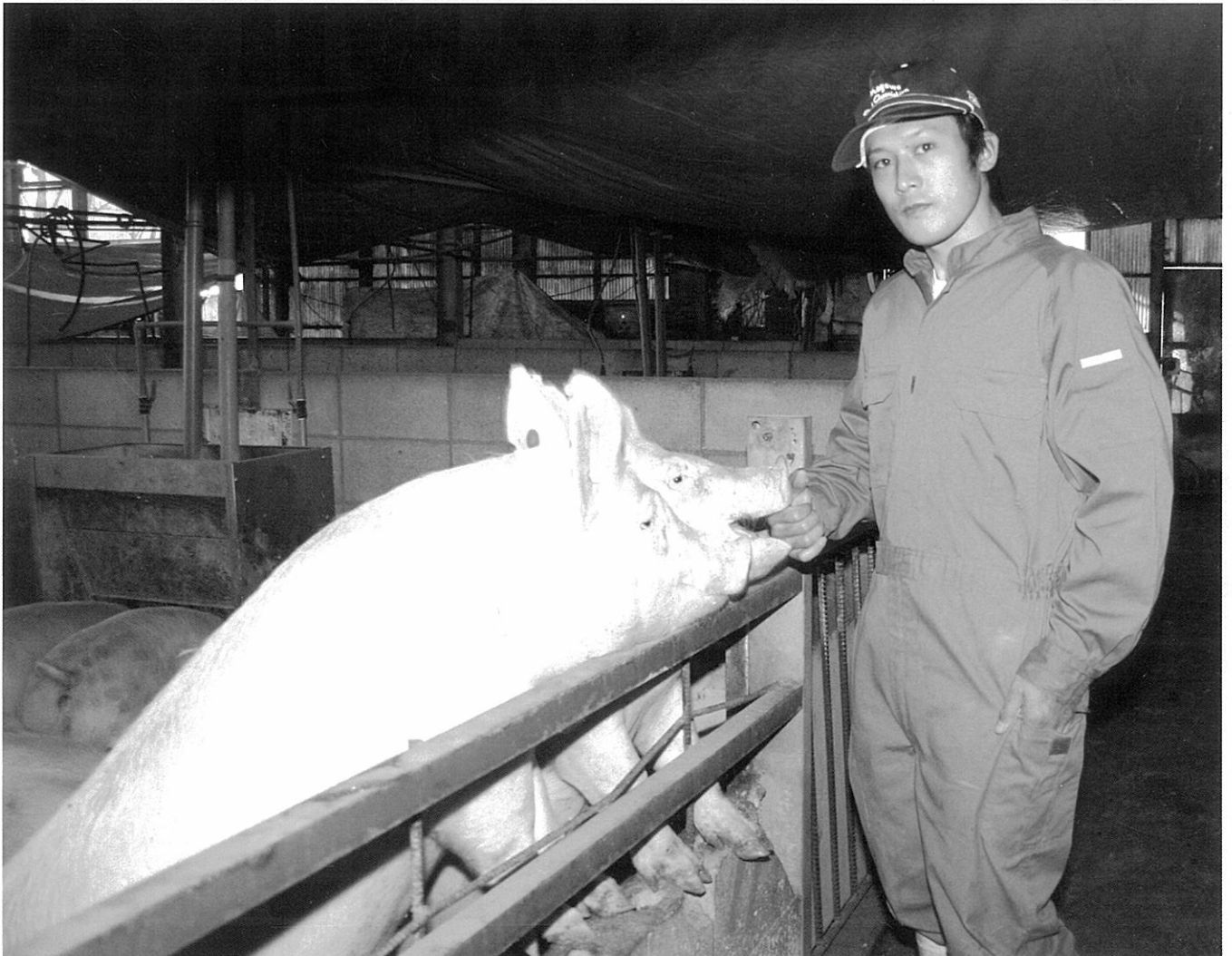
養豚家の明日をサポート!

養豚の友

2

2008
FEBRUARY

特集・消費者が魅力を感じる豚肉とは?



若手・後継者が活躍する養豚場／横山正至さん
オガコ豚舎における寄生虫病対策

ネイチャーズが ナノバブル技術の事業説明行う

(独)農研機構ほか

十二月二十日、東京赤坂の自転車
会館ホールにおいて、「農林水産分野
におけるマイクロバブルの利用シン
ポジウム」が開催された。注目が集
まる極小泡（マイクロバブル）の技
術的解説、可能性について、大学や

研究機関などの専門家が集まり、企
業担当者も集まる中、研究者の講演
が行われた。主催は(独)農林水産先端
技術産業振興センター（STAFF）
と(独)農業・食品産業技術総合研究機
構生物系特定産業技術研究支援セン
ター（生研センター）。



演壇に立つネイチャーズ(株)・松村栄治社長。

六名の講演者のうち、
ネイチャーズ(株)の松村
栄治社長は同シンポジ
ウム講演者唯一の事業
化事例として、ナノバ
ブルが果たす効能につ
いて貴重な講演を行っ
た。
松村社長は「マイク
ロバブル・オゾン水の
特性とその利用」と題
して講演。同社は二〇
一〇nm（ナノメートル）
の気泡を発生溶解させ
る技術を持ち、オゾン

ガスと混合させ高い消毒力を持つ超
微細気泡「ナノピコ水」を開発した。
従来のオゾン水では脱気しやすく、
排オゾンガスが大量に出て危険であ
るといふ欠点をクリアしており、畜
産現場や食品加工現場で効果を上げ
ていることが報告された。

講演では、ナノピコオゾン水は高
い消毒能力と使用後の安全性が求め
られる農業、畜産分野への活用が見
込まれ導入されている。養豚場では
散水に使用。ブドウ球菌が原因で皮
膚がびらんした子豚が、一日約三〇
秒ナノピコオゾン水をシャワーした
だけで改善したと、比較写真で説明
した。それに伴って飼料をよく食べ
るようになり増体に好影響も与えた。
この農場の二万頭のと畜データでは、
内臓の病変有無を獣医師が確認、集
計したデータによると、病原性の大
腸炎は八〇～一〇〇位の豚に異変があ
ったものが、ナノピコオゾン水の使
用により季節性を問わず二％を超え
ないところまで減っている。このよ
うな結果が得られることは、食品と
しての安全性が高まるとともに、治
療の投薬量が減って薬品代が削減で

日本の養鶏農家を 応援する	月刊	養鶏の友	毎月1回1日発行 定価1,250円(税込)送料100円 年間15,000円(税込・送料サービス)
養豚家の 明日をサポート!	月刊	養豚の友	毎月1回1日発行 定価1,250円(税込)送料100円 年間15,000円(税込・送料サービス)
農家の経営をフォロー する技術情報誌	月刊	養牛の友	毎月1回1日発行 定価1,250円(税込)送料108円 年間15,000円(税込・送料サービス)

●ご注文は弊社まで
〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-37-20
TEL: 03-3379-3741 FAX: 03-3379-3787
E-mail: chikusan@pluto.dti.ne.jp

年間購読受付中

(株)日本畜産振興会

きるとした。また、パルボ、エンテロ、ヘルペスなど豚のウイルス類に対し、特に塩素への耐性が強いものを対象に試験した結果、濃度が低い状態でもナノピコオゾン水はすべてウイルスを不活化できている。

豚の健康への影響を調査するため解剖しても内臓などにも以上な所見は認められず、高濃度8ppmのナノピコオゾン水だけを飲ませても豚の健康に変化が見られない、つまり安全性も確認できている、とする内容だった。

また、鳥インフルエンザを念頭にした鶏卵の洗浄水に使用する試験も行っている。高病原性のH5N1を用いた北海道大学での試験の場合、ナノピコオゾン水に接触させたとき、瞬間に鳥インフルエンザウイルスを破壊している。

サルモネラへの試験では、次亜塩素酸一五〇ppmの溶液とナノピコオゾン水と比較。次亜塩素酸は一〇の八乗では効くが、九乗では塩素が効かない。しかしナノピコオゾン水は一〇ppmが接触しただけで完全に滅菌ができています。すでに実際に導入され

ているというGPセンターでの事例をもとに解説していた。

このほか(独)農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所 食品工学研究領域の椎名武夫氏が「マイクログロバブルの食品分野への応用の可能性」、東京大学大学院農学生命科学研究科の太下誠一教授が「マイクログロバブル・オゾン水の特性とその利用」、産業技術総合研究所 環境管理技術研究部門 環境流体工学研究グループの高橋正好氏は「小さな気泡の不思議な世界」、明治大学・農学部の上置雅彦教授は、「マイクログロバブルの農業分野への応用」、熊本県立大学環境共生学部の堤裕昭教授は「マイクログロバブルの水産分野への応用」と題し、それぞれ講演している。

STAFFの岩本睦夫理事長は「今年二月に初のセミナーを開催し、この技術が我が国で生まれ、かつ新規性の高い技術であることに加え、マイクログロバブルの極めて特異的な特性が農林水産分野、環境分野、食品工業などに高い応用性があることを確認できた。その一方で基礎研究面での蓄積が十分ではなく、産業技術と

して活用する上での課題も多いことが指摘されている。発展させ広く普及させるためには産・官・学が共同して研究開発に取り組むためコンソーシアムのような組織作りが必要であると結論が出ている。問題点を絞り、この二回目のシンポジウムが開催された。マイクログロバブルの特異的

な作用として植物や魚類など生物の活性を高めると数多くの報告がある。これらの究明など、年明けには共同研究組織の立ち上げに取り組む予定である」と挨拶し、可能性がふくらむ分野であることがあらためて強調された。

第八十九回日本養豚学会大会を開催

日本養豚学会

日本養豚学会は第八十七回日本養豚学会大会を三月十七、十八日に神奈川県厚木市の東京農業大学農学部厚木キャンパスにて開催する予定。

東京農業大学農学部教授・門司恭典

【開催期間】

【大会参加費】

平成二十年三月十七日、十八日
奈川県厚木市の東京農業大学農学部厚木キャンパスにて開催する予定。
同学会では研究者のみならず生産者へも参加を呼びかけている。

会員二、〇〇〇円、非会員三、〇〇〇円、学生無料(懇親会費二、〇〇〇円)
【懇親会】
日時：三月十七日 一八：〇〇～(会場 食堂げやき)

【会場】
東京農業大学農学部厚木キャンパス
〒二四三—〇〇三四

【講演要旨代】
会員二、〇〇〇円、非会員三、〇〇〇円

【開催要領】
神奈川県厚木市船子一七三七
TEL・〇四六—二七〇—六五八六

【大会委員長】
第一日(三月十七日)
九：三〇 開会・挨拶